

Saul Bellow's *More Die of Heartbreak*

—想像力の危機—

馬場美奈子

## Summary

### Saul Bellow's *More Die of Heartbreak* : The Crisis of the Imagination

Minako Baba

Saul Bellow's latest novel, *More Die of Heartbreak* (1987), portrays the symbiotic relationship between two aesthetic intellectuals, an uncle and a nephew. Both of them struggle together toward a spiritual rebirth amidst the materialistic contemporary urban society which is controlled by fear of death, hunger for power, and principle of sexuality. The uncle, a loving person and a fine botanist, with an almost visionary power to see into the mysteries of nature, is distracted mainly by the physical beauty of a woman and makes the mistake of marrying her, only to find himself embroiled in an insidious plot involving extortion of money out of his own relative, and is driven into a spiritual and psychological crisis even to the point of losing his precious power to commune with flowers. In consequence, the nephew, the narrator of the novel, who has been seeking spiritual guidance from his uncle, is not only thwarted in his metaphysical quest but also obliged to reverse the spiritual father-son relationship, playing the role of a psychological advisor to the uncle. At the same time, he has to come to terms with his own desire for his former girl friend.

The fundamental problem that informs the entire novel is the crisis of human imagination, the crisis which is caused by the exhaustion of true love in "the age of desire," and which in turn causes further degradation of love. Furthermore, the prevailing sense of crisis seems to betray the author's own, as evidenced by the obsessive yet cynical narrative tone, the ironic-comic characterization leaning toward caricature, and the dehumanized, featureless cityscape reflecting the contemporary high-tech society. Although the two principal characters eventually come to terms with their problems and barely crawl out of the critical situation on the strength of humane emotions, the fundamental crisis of the imagination is left unsolved, and the novel is open-ended. Finally, however, the image of the solitary narrator telling the story of his beloved uncle, who has flown to the North Pole in anticipation of witnessing a slow growth of arctic lichens and reviving his own loving spirit, manages to convey a glimmer of hope for the rebirth of the imagination and love, and such a hope is shared by the narrator and the author.

ソール・ベローは彼の中期の代表作 *Herzog* 以来、現代都市文明に対峙する孤独な知識人の魂の苦闘を繰り返し描いてきた。*More Die of Heartbreak* (1987) は、「欲望の時代」(69) を生きつつ霊的な再生を模索する二人の知識人の共生的な関係を描いた小説であり、語り手が語る彼の叔父の人生の危機の物語は、語り手の自己探求とその挫折をも物語るものである。ここに描き出される危機とは、究極的には、現代都市文明を生きる知識人の愛と想像力の危機であり、そこには作者自身の危機感が投影されていると思われる。以下、二人の人物の苦闘をめぐって、様々な人間像と都市像の中から浮かび上がる想像力の衰弱の諸相と、作者ベローの想像力のありようを考察し、最後に、小説の結末に再生の兆しを読み取ることができるか否かを考えてみたい。

語り手 Kenneth Trachtenberg は、フランス育ちのロシア文学者であるが、彼は学識と男性的魅力を兼備した元外交官の父親よりも、ユダヤ的な家族愛を大切にす植物学者の叔父 Benn Crader を慕い、両親の故郷、アメリカ中西部に渡ってきた。精神医学者の土居健郎によれば、フロイトの「同一化」の概念は日本語の「甘え」の概念に相当するが(土居 224)、実の父親に甘えそこなったケネスは、ベンに父親像を求め、同一化しようとしているとすることができる。更にケネスの移住の動機は心理的のみならず観念的なものであり、フランス知識人達の提出する思想の不毛性を感じ取ったケネスは、「人間の生活が本質的な進歩を遂げている」(230-1)と思われるアメリカに自己実現の場を求めたのである。但し、ケネスが抱いていたアメリカ像は、「啓蒙、科学、民主主義」(256)の国という、近代啓蒙思想に基づく古典的なアメリカの理念であり、また彼の自己探求とは、「欲望の時代」の人類を霊的な方向に転換させることであった。ケネスもまた他のベロー主人公達と同様に、古い価値観を追い求めるドン・キホーテの人物であり、預言者の使命感の持主でもある。

ケネスが同一化し、自己探求の指南役として選んだベンは、世界的な植物学者であり、植物の神秘に対して幻視力にも近い洞察力を持っている。ケネスはベンが William Blake のような「永遠の住人」(69)であることを期待しているが、緑の森という聖堂の中で宇宙と対話するベンのイメージ——“a communicant in a green church” (305)——は、ブレイクよりも R. W. Emerson に近い。ベンに関わる二つの事柄がエマソンを連想させる。第一に、彼の亡妻 Lena は Emanuel Swedenborg の愛読者であったが、スウェーデンボルグは、エマソンを始めとする十九世紀アメリカ思想家達に多大な影響を及ぼした神秘主義思想家である<sup>1)</sup>。エマソンは *Representative Men* においてスウェーデンボルグを論じ、他のエッセイにおいてもしばしば言及している<sup>2)</sup>。第二に、ベンの大きな青い眼も象徴的である。「視力の元型」(234)を象徴するかのよう澄んだ青い眼は、エマソンの言う“transparent eyeball” (Emerson 189) のイメージを喚起するように思える。更に、「光そのものによって作られ、被造物達に光を見る〔啓蒙される〕ことを求めているかのような…眼」(234)のイメージには、エマソンの宇宙観のみなら

ず、ユダヤ神秘主義思想も暗示されていると言える。神秘主義思想に興味を抱くケネスにとって、ベンのカバラの『ゾーハルの書』に記されているような世界中に散らばっている光、救済の時に向けて集められるべき閃光の一つなのではないだろうか。<sup>3)</sup>

なお、最初に述べたように、ケネスとベンの関係は共生的な関係であり、ケネスがベンに形而上学的な探求における指導を仰ぐ一方で、ベンはケネスに文学的知識や社会常識の教示を期待している。

では、ケネスとベンを取り囲む現代アメリカの都市文明は、どのような様相を呈しているであろうか。舞台はアメリカ中西部の大都市。近年のシカゴを思わせるようなこの街を、ベローはあえて名付けず、街の（そして物語の）中心に「シカゴのシアーズ・タワーとほぼ同じくらい大きな」(44) 摩天楼を据え、あたかもシカゴとは別の大都市であるかの如くに語る。なるほど、この日系資本で建てられた“Electronic Tower”には、工学技術会社、商事会社、保険会社、会計事務所、外国領事館などが入居しているとあれば、これは特定の都市の建物というよりは、都市再開発と情報化社会の記号とも解釈できる<sup>4)</sup>。いずれにせよ重要なことは、この「電子塔」はベン少年時代の家の跡地に建てられたということと、その土地の売却代金の大半はベンの叔父の Harold Vilitzer に掠め取られてしまった、ということである。聳え立つ「電子塔」の下に自分の過去が深く埋もれてしまったことを、ベンはユーモアを交えた語調で嘆く。

And every time I come near a window, I see that goddam skyscraper. My old life is lying under it—my mother's kitchen, my father's bookshelves, the mulberry trees. It's like one of those drowned villages in the TVA valley, where you'd have to be a scuba diver to revisit your childhood. (196)

「忌わしい摩天楼」は、ベン少年時代の、即ち1930年代のユダヤ系移民家族の歴史の面影を、あたかも1930年代に建設されたテネシー峡谷ダムの底に沈められた村のように、葬り去ってしまった。このハイテク時代の超高層ビルは、大都市を動かす巨大な力の象徴であり、ベンの人生の危機の象徴でもある。

「電子塔」に象徴される都市を支配している原理は、権力、金、性、そして死の原理であると言することができるが、それは「愛や芸術などの全廃を要求する」(301) かに見える。とりわけ、選挙を控えた州知事が、強姦事件の再審公判で検察団を指揮し、中継テレビ・カメラの前で、科学的検証の名のもとに大衆の性的興味を操作することによって自己を顕示する、という奇怪な政治的身振りは、この都市の歪んだ想像力を端的に物語り、一人の科学者としてのベンの心理を傷つけるものである。ケネスはこのような「性的アナーキー」(110) の社会現象の底流に、死からの逃避願望を見据えている。

There are very few people willing to declare themselves out of the running. Stop running, and you join the census of the dead. Hence the sexual craziness in the moves and motives of men and women. (211)

ケネスが思うには、人々は死から目をそらすために、性を生の証しとし、性的な衝動に駆り立

てられているのである。

権力、金、性、死の原理を総合的に体現する人物は、ベンの新妻 Matilda の父親、Layamon 医師である。白い背広の肩を聳やかして歩く威圧的な男レイヤモンは、ギャングの如くに他人を食いものにして生きる街の権力者達——“these stars, this killers' row”(188) ——の代表格である。彼は財力と政治権力の集中する都心の高級マンションに居を構えており、娘夫婦をひとまず自宅に同居させて管理し、娘のためにベンの叔父のヴィリツァーに圧力をかけてベンの土地の売却代金を奪回するという計画を立て、ベンを巻きこむ。また彼は、中年の娘婿ベンに対する嫉妬と不満を晴らそうとするかのように、病棟回診時にベンを引き回し、老いた女性患者達の肉体に現われた死の徴候を見せつけて心理的な圧力をかける。レイヤモンは病を治す医師でありながら、ベンの心の病を惹きおこし、彼を精神的危機に落とし入れる存在である。

レイヤモンの一人娘マチルダは、才色兼備の女性であるが、物質欲と名誉欲が強く、著名な植物学者の妻の座を得たうえで、大邸宅を手に入れて社交界の花形を演じることと、株式業界で活躍することを目論んでいる。父親譲りの広い肩幅と唯物主義的な価値観を持つマチルダは、言わば父親の複製であり、ベンの欲望を喚起する一方で彼を苦しめる存在である。

ではベンは全く無垢な犠牲者であるかと言えば、必ずしもそうではない。彼の意識の変遷をケネスは次のように描写している。

Uncle while still young had found his answer to urban America, a neat way to step aside from the heavy burdens of social development imposed on the soul, there on Jefferson Street. He had moved the deeper interests of his life into the interior of plants. In the dullest weeds the powerful secrets of air, soil, light and propagation were hidden. So he took a transfer from curbstones to crabgrass and mulberry trees, the burdocks growing in vacant lots and freight yards. Then, after some years, he tried to move back again from roots, stems, leaves to human affections. (279)

ベンには都会育ちのユダヤ系移民の息子達に期待された世俗的な成功への道から離脱し、植物の神秘の世界に没入していたが、15年前に先妻のリーナを亡くして以来、人間界の愛と欲望の世界に戻って来たのである。ベンの過去には、彼に失恋したのちに心臓麻痺で死んだ女性や、婚約寸前に彼に見捨てられた女性の姿がある。恋愛と逃走を繰り返しては自責の念に苦しむベンを、ケネスは「放火犯を追いかける不死鳥」(198)と称しているが、ベンは「愛や芸術などの全廃を要求する」かに見える現代都市文明の只中であって、レイヤモン一家に関わる前から真の愛を失ないつつあり、それに伴ない彼の想像力も衰弱し始めていたと言える。ケネスがニーチェを援用して、愛は人間を「豊かにし、強め、より充実させ、芸術家とならしめる」(266)と行うように、愛と想像力は密接な関係にあるのである。

ベンの愛と想像力の危機は、彼がのちにケネスに告白するエピソードによって予告されていた。マチルダに誘われてヒッチコック映画『サイコ』を観たベンは、スクリーンの中の女装殺人者の後姿にマチルダの後姿を垣間見てしまった。しかしながら彼は、低俗な映画に影響され

た自分の想像力を恥じ、本能の警告を無視して再婚に踏みきったのであり、その結果、金銭争奪戦に巻き込まれて疎外感と罪悪感を深め、危機に陥ることになったのである。彼が青い眼の光を失ない、またマチルダの肉体的欠陥を探し出して彼女の美を言葉によって解体しようとしていることは、愛と想像力の危機の徴候である。

真の愛の喪失においては、ケネスも同様である。彼は、彼の子供を産んだのちにシアトルに移り、粗野な男と暮している Treckie の奇妙な性的魅力に執着する一方で、知的で献身的な女性 Dita の好意に甘えている。ケネスに好かれたい一心で手荒い皮膚形成手術を受けたディータを、優しく看病するケネスではあるが、彼女の回復後は愛情に気付かぬ振りをして、専ら話し相手として利用しようとするふしが見られる。

ベンとケネスの想像力の危機は、かれらの関係にも影響を及ぼしている。ベンの再婚以来しばしば悩みを打ち明けられ、相談を受けるケネスは、肉親らしい愛情につき動かされて、また形而上学的探求の再開を願うがゆえに、ベンの心の病を気遣い、訴えに耳を傾けると同時に姿勢や表情を注意深く見守っている。しかしながら、表情から心理を読み取ろうとする行為は、同情といたわりの人間的な行為である反面、相手を対象化して分析する冷淡な行為でもある。ケネスはベンとの交流を通して習得していたかも知れない洞察力について、次のように考えている——“I was just beginning to *admit* that I myself had meant to do (or try to do) for *human subjects* what Uncle Benn did for the algal phycobionts of the lichens” (188 Emphasis added)。最も愛する人間をもいわば「被験者」として客体化しようとしていたことを「認める」、というのは、いわば精神分析者のような科学的態度に後暗さを感じていた、ということであろう。Mark Shechner は、ベローは戯曲 *The Last Analysis* (1965) においてフロイト流の精神分析の効用を描ききったうえでフロイトと決別した、と論じている (Shechner 139)。ところが *More Die of Heartbreak* においては、1960年代後半以後の性の解放、大衆心理学の流行、精神分析的文艺批評の隆盛などの風潮を反映させるために、ベローは再び精神分析的レトリックを使う人物を登場させたのであろう。しかしながら、ベローの視点はあくまでも皮肉である。ケネスは心理学を「近代的意識の揺れの低次元な副産物」(51) と称し、フロイトの心理学体系は生身の人間を捉ええないというが、ケネス自身も心理学の皮相な理解と応用の中に低迷しており、直観的な愛の人からも、想像力豊かに対象を語ることのできる語り手からも、まだ遠いのである。

ベンの危機のクライマックスは、ヴィリツァーとの対決の日を訪れる。四六時中窓ごしに見える「電子塔」が象徴する巨大な力に圧倒されていたベンにとって、ケネスとの対話とレイヤモン夫人の書斎のつつじの花だけが、僅かな慰めと力であった。ところがヴィリツァーとの諍いの日の夜、老いた叔父の発作の原因を作った自己の罪の深さを改めて思い知り、心の支えを求めてつつじの花に手を触れると、それは実はサテンの布地で出来た模造品であった。ベンはここで愛不在の結婚生活の欺瞞と、植物に対する感受性の喪失を、深く自覚するに至ったのである。言うなれば、植物学者ベン・クレイダーは「サテン」の造花の花園に迷い込み、ドクター・レイヤモンの一家の毒気を吸い込んだ結果、ケネスが「あの内なるサテン」(300) と呼ぶ、

しなやかで艶のある想像力を殺してしまったのだ。この皮肉な啓示のエピソードは、まるで N. Hawthorne の短篇 “Rappaccini’s Daughter” のパロディのようである。そしてベンと同一化していたケネスは、深夜の電話でベンの告白を聞き、自己探求の破綻を認識する。精神的支柱を失なったケネスは、同時に「啓蒙、科学、民主主義」のアメリカの夢も破られたと感じるが、ここで彼はアメリカの使命の中に自己探求を位置づけようという企図の尊大さを再認識している。

自己認識に至ったベンとケネスは、各々自らの欲望が招いた事態に收拾をつけるために行動する。ベンはヴィリツァーとの和解を求めてフロリダの保養地に飛ぶが、そこで叔父の遺骸に直面し、哀悼の涙を流す。そして、レイヤモン父娘との緊張した関係からも、ケネスとの親密だが不毛な関係からも自己を解放し、自己再生の旅に出る。一方ケネスは、嫉妬と怒りのエネルギーを抱えてシアトルに飛び、トレッキーに怒りをぶつけるが、そこで二人の関係が完全に終わったことを認識したうえで、子供の養育権をめぐる交渉をし、父親の役割の一端を果たそうとする。John Updike が指摘するように、ベンとケネスは知力ではなく「感情の備蓄」(Updike 91) によって、かろうじて危機的状況から脱出したと言える。なお、公的領域によって侵害された私的領域、とりわけ人間らしい感情の回復は、近年のベローが繰り返し探っているテーマであるが、それはこの小説の題名にも表わされている。タイトルの由来は、科学者ベンがチェルノブイリ原発事故について意見を求められた時、失恋して心臓麻痺で死んだ女性のことを頭にあったので、「放射能汚染で死ぬ人間の数よりも多数の人間が、心の痛みで死んでいる」と放言してしまった、というエピソードである。この一見非人道的で保守的な題名の中に、個の尊厳に対する作者ベローの信念が、皮肉な形で表現されているように思える。

さて、小説の結末におけるベンとケネスの愛と想像力の行くえを考察する前に、文体に注目し、語り手ケネスと作者ベローの想像力のありようを探っておかねばならない。この小説は以前のベローの作品にもまして独我論的な作品であるが、生きいきとした色彩と調性を与える手法も見られる。第一に、鮮やかな心象や比喩の多用。「電子塔」、「心の中の氷河」、「つつじ」、「不死鳥」などの主要なイメージ以外にも、多数の奇抜な比喩が語りにアクセントを付け、人物像に膨らみを与えている。例えば、「叔父さんがまるで車掌が乗換え切符を集めるようにルーティン的に、ひどい仕打ちを受け取っていくこと」(“uncle’s accepting abuses as routinely as a conductor” 204) という直喩は、お人好しのベンの生き様を浮き彫りにすると同時に、それを見ている語り手ケネスのいら立ちと嘆きを伝えるものである。

第二に、人物描写における大衆文化の記号と高級文化の記号の並置。一方で、悩めるベンの自画像の表象としてヒッチコック映画や Charles Addams の漫画が言及され、またケネスの肉体的劣等感を表現するためには、筋骨逞しい映画俳優 Arnold Shwartznegger の名前が引き合いに出される。また他方では、古代神話、聖書、文学作品、歴史などの引喩が続出するが、なかでもベンやケネスの理想の女性像と、E. A. Poe における女性像の対比が、繰り返しなされている。

第三に、都市の風景の写実的かつ幻想的な描写。例えば、ヴィリツァーに勤当された彼の長

男 Fishl が事務所を構える建物の内部の様子が、低速の旧式エレヴェータの上昇に従ってドア越しに見える光景として提示される。

He had all the time in the world. The appearance of the lobby of the old building where he had his office told me that he was unlikely to be very busy. These premises went back to the beginning of the century. The elevator with its squiggle ornaments was slow, and I had lots of time for observation—on the first floor a taxidermist specializing in birds; on the second, a shirtmaker dating back to Edward VII, and a homeopathic pharmacist with flagons of pink and green fluid, and also jars stuffed with herbal remedies; next a sanatorium thrift shop with old waffle irons, electric percolators, cocktail shakers and antique golf clubs. . . . Fishl's office shared a corner of the corridor with a men's lavatory. (174)

この一節は建物自体の古めかしさを描くと共に、剥製師、シャツ製造業者、同毒療法製薬業者、療養所の中古品販売業者など、時代遅れで風変わりなテナント達に混じって、手洗所の横でひっそりと営業しているフィッセルのうらぶれた状況を簡潔に描き出している。他方、権力を象徴する州裁判所の建物はポストモダニズム建築として描写される。

Some of the wild genes of the younger Brueghel or Hieronymus Bosch must have flared up in the architect. I did my utmost to grasp his conception. Billions of brain-born wasps working in the blue glass had made this mammoth round structure; it was designed in dazzling elliptic curves modeled on the celestial sphere and it showed what bold fantasy could realize, relying on the skills of engineers, on miraculous technology. "Humongous!" said Uncle Benn.

It didn't threaten Heaven, like the Tower of Babel, but subsided from the heights and melted downwards. A computerized bureaucracy no longer needed straight corridors. (269)

技術革新時代の知力と想像力と技術を結集し、天体の曲線をモチーフとして設計された巨大で奇抜な建築物は、地から天に挑むと言うよりは、空中の高みから下って地と融合するかに見える。これ即ち宇宙をも征服し始めた人類の意識の産物であり、保守的な文学者ケネスの想像力と理解力を超えて、賛嘆の対象である。ここには、現代の都市景観によって想像力の挑戦を受けるシカゴ作家ペローの、アンビヴァレントな視点が投射されていると言える。

しかし以上のようなペローお得意の手法は、この小説において、作品世界の造形や文体の活性化に対してそれほど積極的な作用を果たしていると言い切れるだろうか。人物描写における映画や漫画のモチーフは、装飾的な機能を超えるものではなく、最終的には大衆文化による汚染の現象を印象づけるのみである。また文学的、歴史的引喩の大多数も、雑多で印象が薄く、人物像に十分な広がりや深まりを与えるまでには至っていない。ここには語り手ケネスの知識



はともかくも、想像力の豊かさは浮かび上ってこない。都市像に関しても同様のことが言える。この小説には建築物の描写やガラス越しに見える空間の点描はあっても、躍動感湧れる街頭風景が無い。つまり、従来の都市小説の中心に据えられていた地上の高さの日常的、人間的視点が欠落しているのである。The Dean's Decemberの主人公は、アメリカ全体を一大都市と化す通信革命を憂い、都市の個性の喪失を都市の存在の消滅と同一視していたが、More Die of Heartbreakでは、ベローは意図的に無表情な匿名の都市像を提出しているようにさえ思える。この小説において、人間的コミュニケーションを困難にする無機質な都市の只中で、想像力の危機と闘う孤独な語り手=書き手の姿を、ベローは描こうとしたのではないだろうか。

それでは、小説の結末には想像力の再生の兆しは示されているのだろうか。ベンは財産をマチルダに移譲し、古いアパートと鉢植と蔵書をケネスに託して、冬の北極の闇と氷の中で自己再生を期そうとしている。即ち「不死鳥」ベンは自分の姿すら見えない暗黒の中で自我を消し、極寒の中で「心の中の氷河」を溶かして愛と想像力を蘇らせようとしている。極地の凍った地衣が大気中から滋養を得て、ゆっくりと蘇生し成長するように。一方ケネスは、私室の空間と独我論的な語りの空間の中に退行しながらも、ベンの亡妻リーナの蔵書に囲まれて、スウェーデンボルグの神秘主義的人間観やバルザックの人間ドラマを描く想像力を継承することを願い、またディータの助けを貸りて娘を養育し精神的遺産を伝えることを決意している。

だがしかし、再生の展望はそれほど単純明解ではない。巻末でケネスはベンの連絡先のメモを手になっているが、小説の結辞は次のような不可解な言葉である。「多分 Novaya Zemblya の近くだろう。それだって充分に遠くはなかったのだ」(355)。一体どこから「充分に遠くはなかった」のだろうか。ベンは「充分に遠い」地を求めてさすらい、音信不通となったのか。あるいは、ジェット時代においては極地すらも「欲望の時代」の世界から「充分に遠くはなかった」から、真の愛と想像力の再生は望みうすとなったのか。そもそもこの小説は、「去年、叔父さんが危機を経験していた時に……」(9)という書き出しで始まるが、ケネスがベンの「危機」に関わりあったのは一月から二月のことであり、ベンは二月中には旅立ったと考えられる。従って、ケネスは一年近くが経過したのちにこの回想と思索の書を書き始めたことになる。そしてベンの旅立ちまでの物語を語り終えた時点でも、ベンの「人生の不思議な転機」(210)を把握しきれず、自己探究も完結できないままに、ベンを置いている。そしてこの本を読み終えた読者は、物語の振り出しに戻されるような感覚を味わうのである。

しかしながら、曖昧な結辞の未完結な響きの中からは、語り手ケネス（そして作者ベロー）の「人間存在の神秘」(321)に対する思い入れと、それを表現しようとする意志が伝わってくるように思える。現代都市文明を見つめつつ、「この灰から僕が蘇ることができるかどうか見てみよう」(334-5)と言い残して北極の彼方に飛んで行ったベンの姿を追いつけるケンの意識は、人間存在に対する愛と想像力の証し、まことにささやかなる証しであり、それはまた作者ベローの人間観と想像力を反映するものではないだろうか。かつてベローは *Henderson the Rain King* の結末において、北極地方の氷の情景を背景としてヘンダーソンの再生を暗示していたが、あれから30年。More Die of Heartbreakにおいて老作家ベローは、自らの想像力の残照

に照らしつつ現代知識人の想像力の闘いを描きあげた。ベローは全世界的な環境汚染と人間の価値の低下に絶望し、見慣れたシカゴの消滅に「心を痛め」つつも、人間の想像力の再生に対する淡い希望を捨て去ってはいないと考えられる。

注

- 1) Robert Fuller, *The Americans and the Unconscious* 参照。
- 2) エマソンは、例えば“Nature”や“The Over-Soul”において、スウェーデンボルグを引用し、また“The American Scholar”においても言及している。
- 3) ユダヤ神秘主義については、ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』参照。
- 4) 1970年代以後の都市論に関しては、Jon C. Teaford, *The Twentieth-Century American City* 参照。

《参考文献》

- Bellow, Saul. *More Die of Heartbreak*, New York: William Morrow and Company, Inc., 1987.
- Emerson, Ralph Waldo. *Selected Writings by Ralph Waldo Emerson*, ed. William H. Gilman. New York: The American Library, 1965.
- Fuller, Robert C. *The Americans and the Unconscious*. New York: Oxford U P, 1986.
- Shechner, Mark. *After the Revolution: Studies in the Contemporary Jewish-American Imagination*. Bloomington: Indiana U P, 1987.
- Teaford, Jon C. *The Twentieth-Century American City: Problem, Promise, and Reality*. Baltimore: The Johns Hopkins U P, 1986.
- Updike, John. “Hearts and Minds,” *The New Yorker* 20 July 1987: 89-91.
- 土居健郎。『甘えの構造』(1971)。東京：弘文堂，1988。
- ショーレム，ゲルショム。『ユダヤ神秘主義』(山下他訳)。東京：法政大学出版局，1985。

(原稿受理 1988 年 11 月 28 日)